第37回諜報研究会

「南京事件と報道記者」

『清六の戦争』を事例に

報告：毎日新聞　伊藤絵理子

自己紹介

- ２００５年　毎日新聞入社
- ２０１１年　情報調査部、清六との出会い
- ２０１５年　連載「毎日新聞１９４５」
- ２０２０年７月～８月、連載「記者・清六の戦争」
- ２０２１年６月　連載に加筆「清六の戦争」出版

伊藤清六の足跡

・１９０７年、岩手県生まれ

・宇都宮高等農林学校卒業、東京日日新聞入社

・１９３７年10月～１９３８年１月、従軍記者として日中戦争へ

・１９４４年４月、フィリピン「マニラ新聞社」に出向。邦字紙の取材部長。

・マニラ東方の洞窟で陣中新聞「神州毎日」を発行

・１９４５年６月３０日、山中で餓死。３８歳。

従軍記者の始まり

・最初の従軍記者は１８７４年台湾出兵の岸田吟香

・日清・日露戦争で本格化

・１９３１年満州事変以降、新聞社は戦争協力へ。従軍記者の態勢も拡充

守れ滿蒙—帝國の生命線

日本民族の血と汗の結晶！特殊權益

炳として存在する各條約斷じて侵害を許さず

關東州の租借

南滿洲鐵道經營

滿洲事變導火線

「何故日本は起つた？」

權益蹂躙と排日

この暴戻の事實を見よ

誘——因

遠——因

鐵道利權蹂躙

空文の商租權

懸案三百餘件

滿鐵並行線問題

他の鐵道權利

事變の發端

言論統制への道

・満州事変後、日中戦争までの６年間に法令、組織ともに統制の整備が進んでいく

・柱は新聞紙法（１９０９年制定）
　　前身は１８７５年新聞紙条例
　　「安寧秩序を乱し、または風俗を害するものと認めるもの」が検閲の対象

・東京日日新聞記者・田中菊次郎
　「支局長のデスクに記事差し止めの綴りがあった。支局員は皆これを記憶した」

・軍事ジャーナリスト・伊藤正徳
　「ジャーナリズムの戦いは、満州事変で５０％、国連脱退で９０％、二・二六事件で９９％終わった」

日中戦争勃発　１９３７年7月７日、盧溝橋事件

- 新聞紙法第２７条発動

「陸軍大臣、海軍大臣及び外務大臣は新聞紙に対し、命令を以て、軍事もしくは外交に関する事項の掲載を禁止し、または制限することを得」

↓

- 「記事差し止め事項」

一．反戦または反軍的言説を為し、或いは軍民離間を招来せしむるが如き事項」

二．我が国民を好戦的国民なりと印象せしむるが如き記事…」

- 統制機構も拡充

９月　内閣情報部

１１月　大本営報道部

東京日日新聞特派員・藤田信勝

「架空の武勇伝を書くこと、神話づくりが従軍記者の任務だった。事実を伝えるのではなく、軍の発表にしたがって、国民を鼓舞する『ペンの兵士』であることを使命と考えねばならなかった」

ジャーナリズムのゴールドラッシュ

雑誌「文芸春秋」３８年１月号

　上海戦線の膠着状況が終わり、軍が南京へ向かうのに合わせて一層過熱する報道陣の様子が描かれている。

「大新聞はもとより、弱小地方紙までが、特派員の記事なしでは読者の受けが悪いとあって、上海連絡船の着く毎に『敵前上陸』を敢行、鉛筆とカメラと食料とリュックサック姿物々しく、或は軍のトラックへ便乗、或は舟を利用し、或は徒歩で、未だ敵の地雷の埋もれた江南の野を南京城へと殺到した。記者、カメラマン、無電技師、連絡員、自動車運転手ら優に二百名は越えたであろう。ジャーナリズムのゴールド・ラッシュだ。報道戦線の大拡張である」

東京日日新聞の報道体制

１９３７年１２月１４日付　社報号外
　　「世紀をゆるがす　わが社の立体報道陣」

「東日、大毎両社から支那事変はじまって以来、各部より従軍するものすでに百数十名、尊き犠牲となり、或いは傷を受けた者、支那特有の風土病に冒されるものなど数知れず、殊にこんどの南京攻略大追撃の報道戦は並々ならぬものがあった」

記者たちの報告

- 「南京入城は北がかつか南がかつかこのところ競争が見ものです。是非とも南京一番乗りを土産にしたいと勇躍明日出発いたします」
- 「戦線生活のぶつづきは辛いこともありまた何ともいえぬ楽しみもあります。朝日、読売の連中が蘇州でやられたそうですが、小生ももうだめだという場面に直面し、今考えてよく無事だったとしみじみ運の強かったことを喜んでいます」

南京の新聞記者

東京日日新聞、大阪毎日新聞は、市中心部の旅館を宿舎に。

- 「室数六十余の一流大ホテルにて、わが社の特派員六十余名はみな一室ずつ占拠」「敵首都占領の喜びにひたり祝盃をあげつつ皇軍万歳を三唱」
- 「はじめて南京中山門の上に立った時の感激はとても筆紙には尽くせません。各「公司」とも髭蓬々のあかだらけでお互いに『遂々来たなァ』の連発です。三十有数日の辛苦がやっと報いられ、忘れていた笑顔が公司たちの面上に甦ってきました。僕は支局で新たに購入した『デュンダップ』という独逸製の世界一のオートバイで思う存分南京市内を走り回っています。人員、自動車、トラック、通信機等の整備は東日、大毎が断然他社を圧しています。オートバイなどを持っている社はありません。東日、大毎の大きさをこの南京でしみじみ感じています」
- 「漸くたどり着いてみればさすが南京なかなか味のある都に候、目下のところ物資不自由ながら適当に自給自足、時たま連絡員諸氏の腕利き連中が戦利品のモーゼル銃を拝借してぽんぽん豚を撃ち止め豚汁などに舌鼓を打ち居候」

南京攻略戦を取材した東京日日新聞、大阪毎日新聞の記者たち（１９３７年１２月１４日撮影）

元毎日新聞写真記者・佐藤振壽氏の著書「上海・南京　見た撮った」（財団法人偕行社）に掲載

地方版で郷土部隊の活躍報道

敵都へ驀進
裏街道の従軍記

正月にはうまい雑煮だ
山田部隊南京へあがり
ナポレオン以上の急追

「南京陥落のお祝」
日毎夜毎各地で

双葉山が惚れ込み
その場で角界入り
部屋村の怪童石山君

参事會員を選任
縣會いよ〳〵けふ閉會

政策問題を脱線し
危い哉藪蛇論戰
非常時縣會を顧みて

市町村葬

加藤中尉

1937年12月14日付栃木県版

南京陥落の蔭に涙あり
山田部隊の尊き戰死傷

敵の集中射撃物かは
南京城に突入路
雨花台攻撃 殊勲の桐生少尉

將軍山曉の突撃
大豆生田中尉 村上準尉の奇略
南京前哨戰に凱歌

招魂社移轉改築
關係首腦部で實現を急ぐ

公定價格決る

輝く賞詞

母校改築
戰地か

知事顯
生活

1937年12月19日付栃木県版

伝えなかった捕虜殺害

- 東京日日新聞１９３７年１２月２４日付栃木県版
　　「白旗掲げて降伏　捕虜何と千五百名」

「山田部隊高柳准尉の率いる一隊は去る十二日南京城外で激戦中、たまたま倉庫を襲撃した際付近に陣地を持って抵抗中の敵と遭遇し、戦車隊と協力のもとにこれを包囲し殲滅せんとしたが敵軍中から白旗を掲げ降伏して来たので総計一千五百二十名を捕虜とし偉勲をたてた」

- 第十軍第１１４師団第66連隊戦闘詳報
　　「捕虜ハ全部殺スベシ」の旅団命令と、殺害報告

従軍記者・帰国後の講演会

・新聞社や地方の在郷軍人会などの主催

・従軍記者が、出身地、初任地、従軍した部隊の出身地などで報告

　→各地で大盛況

おわりに

- 南京の「紀念館」を訪ねて
- 報道の役割
- 戦争報道のこれから